汲古一心

『御維新と唐様書き』(二)

中村素堂

唐様の命脈を保っていただけの時代はしばらく措いて、今日のこの溌溂たる六朝碑碣の金石文字にまでも及んできた書道（仮名のことについては、後日また精しく述べたい）に、先鞭を着け始めた徳川末期からの先覚者、すなわちハイカラ文人と目せらるる人の中で特色ある三、四人の人々を挙げてみたい。

御維新直前の騒然たる京都市中を、毎日西洋馬具をつけた馬に乗り洋銃を携帯する従者を随えて奔走していたという佐久間象山先生は、なにしろ嘉永元年に洋式野戦砲を造ったというくらいの人だから、素晴しい当時の新人だったに違いないが、芸苑一夕話に載せてある梁川星巌の夫人紅蘭女史の話によると「この節、京都には攘夷の論が盛んで大藩の士も多く上っており、浪士も多く徘徊し、なかには過激の徒もあることなれば、暗殺の危険がないとは申されぬ。人目に立つようなことは、なされぬがよかろうと注意した。象山これを聴き、ご注意はかたじけないが、今度の上京は、幕命とはいいながら、実は朝廷のご内意もあり、自分の志の行われ、自分の説の用いられるも近いうちであります。昨今物騒には相違ないが、さのみ恐れるにも足らず、ご心配に及ばずというて、聴き入れる様子が無かったが、象山は数日を経て、ついに刺客の手に斃れたのである」と伝えられてある。これは実に元治元年七月のことである。この自信、この新式好みの象山先生のことである。堪能であった書道の方面においても、日本人としては一番最初に手をつけたのではないかと思うが、漢の楊孟文の石門頌の拓本を習ってよく筆意を得ていたことは、その揮毫文字の線の持つ味を石門頌の拓本と比べてみれば、一見首肯し得るのである。あの時代にこの拓本がどうして手に入ったかということさえ不思議なくらいであるのに、ただに隷体ばかりでなく楷・行・草どの書体にも、あの神仙味を帯びた筆意を応用しているのには驚かされるのである。しかもその裡にまた別に唐の顔真卿あたりの調子もひそめてあるなどは、さすがに当代における新人としてこの方面にも手抜かりの無かったことが察し得られるのである。

次に唐初の虞世南の傑作として唐碑第一の称がある孔子廟堂碑の拓本に手をつけて、専心あの温雅なる筆意を汲んで知られたのは、嘉永年中阿部閣老の嘱によってロシア国に対する返信の公文書を書いたという小島成斎先生で、先生もまた新人として刮目して見るべきひとりである。この人も廟堂碑以外孫過庭のものなどにも手を延しておられたと名家史伝にあるくらいで、たしかに唐様書きの中での新人であったろう。幕末の槍術家として、また明治の三舟として海舟、鉄舟両先生とともに喧伝されている高橋泥舟先生は実にこの成斎先生の系統に出るもので、これはまたその清節をもって鳴った人柄と相和して風韻一段と見るべきものがある。ただこの泥舟先生の書については往々あの草書の素晴しく転折の厳しいものだけを知って、この高朗遒媚なる書品のあることを知らない人があるのはいかにも遺憾に堪えない気がする。

以上の漢代、唐代の筆蹟について宋人の筆蹟をうかがって書名天下に鳴っているものは、あまりにも有名過ぎる頼山陽先生である。宋人のうちでも山陽先生の最も拈香したものは、石は宇宙の骨だといって礼拝したという嚢陽の米芾の書であったことは、大抵の人が知悉している。ただこの山陽先生の父君春水先生は、また別に清国から本邦へ渡来した趙陶斎の門人であったのだ。清人趙陶斎の門人として名のあったものはこの頼春水先生と十時梅崖先生とである。先年神戸拳一氏珍蔵の展観があった時、この趙陶斎が蕭散たる一本の秋菊を描いたものに、右下へ小さく賛をして「壬戌之秋門生酔学士梅崖賜拝題」としてあったのを見たことがある。いささか違うように見えても春水先生の作品の趙氏のものと比べると、何か共通するものがあるのを発見する。

次に明人の書を学んだ人であるが、これは割合に多い。ただそのうちで少々さかのぼるけれども長崎で勉強し、明人兪立徳に就いて文徴明の書法を伝えられたという北島雪山先生は、細井広沢という有名な門人があって一番その風を天下に弘め得たのであるが、この人は黄檗の名僧達、これはみな渡来人であるが隠元、即非などという連中とも交際があり奇行をもってすこぶる知られている。ついでにちょっと余談になるが、雪山先生の書風を最もよく伝えて名を後世になした広沢先生は、その入門当時「お前が門人中で一番無器用だ」と叱られていたという話である。おそらく発奮して努めたのではないかと思う。この人はまた泥舟先生のごとく非常な武人でその方面にもいろいろおもしろい話があるが、四十七士の堀部安兵衛は同門の盟友であったということが随分よく人に知られている。

（つづく）

〈『故宮歴代法書全集』月報、昭和五十二年〉